



ホッブズの『リヴァイアサン』を読むと、だれでもその執拗な体系性の追求の果てに成し遂げられた論理的構築物の壮麗さに驚く。そして、そこで述べられた赤裸々な人間観察のえぐるような鋭さに肝を冷やし、同時にその人間たちから非情な人工国家が立ち上がるのを見て悪夢を見るような気になる。しかも問題は、それが他ならぬ一人ひとりの相克性、つまりどうしようもない人と人との非和解性に裏付けられているということである。『リヴァイアサン』の表紙には有名な絵が飾られているが、その巨大な体は人間たちからできている。

コントロール不能な主権的権力

ホッブズがいうように、正統性をもって人間を殺す存在として国家はある。それは死刑執行であるかもしれないし戦争であるかもしれない。我々一人ひとりのまさに合意によってこの存在は正統性を与えられている、とホッブズは言う。

多くの日本人は、偶々自分はこの国に生活しているのであって、なにも国家が戦争をするのも死刑を執行するのも認めたことはないというかもしれない。しかし、ホッブズによれば、警察や軍隊によって安全が守られることに依存してのみ我々の生活は成り立つ。つまり、手の汚れていない人間はいない。この責任を引き受けるという自覚から、いわゆる近代的市民の政治意識が出發する。少なくとも近代の人々の大半は、権力を自然に存在するものと考えない。権力はその存在意義を説明しなければならない。その説明を受けることによって、市民は責任を共有する。

しかし、この市民たちは、主権的権力をコントロールできないとホッブズは言う。権力は、市民間の紛争を解決し敵を倒し秩序を維持するために必要だ。しかし、権力をコントロールしようとするれば、権力自体が市民間の紛争に巻き込まれてしまう。それは分裂を招き、本来の権力樹立の努力が水泡に帰す。だから、主権的権力はいったん設立されたら、そのコントロールはあきらめざるを得ないというのだ。彼は、市民が皆善人で自分に不利な約束でもきちんと守るような人格であるのなら、国家は要らない、という。ホッブズの理論にとって、人が強制がないと約束を守らない、ということは決定的である。約束を守れなければ、人々は手続きに従って統一的な意志を形成できない。彼は、周知のように1642年からのイギリスの内戦と恐怖政治を経験した。国王は首を切

られ、政権の保持者は次々に変わり人々は自発的に秩序を作り出すことができなかった。主権のコントロール不能を説くこの説明を、我々は克服することができるだろうか。

我々はお互いの約束を信用することができるか、基本的にはどんな重大な問題についても平和的に合意を形成することができるかは、もちろんいえない。多数決にしてもその実行を担保するのは容易ではない。「程度問題である」という答えがあるであろう。では我々はただ些末な問題についてのみ民主的コントロールを達成しうるが、重大な問題については権力者の実力に基づく強制的決定に服さなければならないのであろうか。この問いかけに対して、少なくとも現代の現実主義の国際政治学者はイエスというだろう。ホッブズの問題提起が根元的なのは、主権的な権力の必要を一人ひとりの存在と意志とに根拠づけたからであり、そして同時に「自由で平等な」人間たちはお互いの必要とする強制権力をコントロールできない、というアポリア(難問)を提示したからである。地球的規模で見れば、我々はまだこのアポリアを解決していない。そして、国家レベルにおいても、サライェヴォの悲劇を見れば明らかなように、オリンピック会場は数年後には戦場になる可能性をもっている世界に住んでいる。公然たる内戦状態においてのみならず、それぞれの欲望を追求しバラバラに競争しあっている我々は、美しい「民主主義」や「人民主権」と言う建前の背後の現実を見れば権力をコントロールできないし、していないのではないか、そうホッブズは問いかけるのである。法にせよ約束にせよ、それは言葉に過ぎない。言葉に過ぎないものにどのようにして力をコントロールさせることが可能なのであろうか。ホッブズの答えは、それは恐怖によってである、というものであった。より大きな力によって、といってもよい。しかし、それはどこかで行き止まる。その時権力は、コントロール不能なのである。

generosityの思想史

非常に稀ではあるがホッブズが認めている例外は、彼が「寛大さgenerosity」としているものを人々が持っている場合である（第14章、水田洋訳岩波文庫版、訳は必ずしも同じでない1-232頁）。つまり、約束をした人間のある種の徳によってである。それは、彼によれば「自慢やプライドa glory or pride」に関係している。実はこのgenerosityという概念には、遠大な思想史の伝統がある。古くはアリストテレスの「矜持」(megalopsuchia = 魂の大いなること)、プラトンの「気概」(thumoeides)に遡り、後に下ればモンテスキューの「名誉」概念が直接これに繋がる。「矜持ある人とは何よりも名誉に自分は値すると・・・もちろん自己の価値に依拠して・・・自認している人々」(『ニコマコス倫理学』1123b 高田三郎訳岩波文庫版上146頁)である。これらは、伝統的には戦士の徳として言われてきたものである。戦士は、自らの誇りのために死を賭しても約束を守る。この徳は、古代共和制の市民戦士の徳として古代民主制を支え、また戦士貴族の徳として中世封建制を支えた伝統を持つ。

しかし、ホッブズの世界においては、「人々は絶えず、名誉honourと位階dignityを求めて競争している」(第17章2-31)。人間の「自然の情念は、えこひいきpartiality、プライドpride、復讐revenge、及びその他の類似のものへと導く」。このようにホッブズにとって一般的には、他者との比較に基づくような名誉心、プライドなどは、闘争の尽きせぬ原因であって約束を遂行させて平和状態を導くよりもむしろ戦争状態を導く。「すべての人間は、等しく生まれながら自由」(第2章1-95)「平等で」(第13章1-207)ある。この「平等から不信が生じ」(第13章1-208)「不信から戦争が生じる」(第13章1-209頁)。彼らは、「他の人々に統治されるよりも、自分で自分を統治したいと思」う人々なのであって、他者と平等に扱われないと平和な状態に入ろうともしない人々である(第15章1-249頁)。

プラトンの想定ではこうなると「国民の魂はすっかり軟かく敏感になって、ほんのちょっとでも抑圧がかせられるともう腹を立てて我慢ができないようになる」(プラトン『国家』563d-e藤沢令夫訳岩波文庫版下-221頁)。この「最高度の自由から最も野蛮な最高度の隷属が生まれてくる」(564-a 下222)ことになる。プラトンにあっては、「気概」的な美德は、もともと不安定で両義的なものでしかない。というのは、それは「文芸・音楽の教養(ムシケー)と練り合わされた理論的知性(ロゴス)」に導かれ

なければ、欲望的部分に引きずられるものでもあるからである。ホッブズにおいては、「善と悪とは、我々の欲求と嫌悪をあらわす名辞であって、それらは人々の気質、習慣、学説が違うのに応じて違っている」とされ、プラトンの善のアイデアに導く理論的知性は存在しない。

また、モンテスキューが共和制には「徳」、君主制には「名誉」、専制には「恐怖」が必要であるとした(『法の精神』第3編第9章)記述は有名である。しかし、ホッブズにおいてはモンテスキューの言う市民の共和制的な徳の存在が初発から否定されて、戦士貴族の名誉心を、一般的には先に見たように自由で平等な存在が措定されることで、逆に相互の虚栄心、名誉心に基づく闘争を招くことになる。

プラトンによってもモンテスキューによっても、ホッブズの恐怖に基づく専制への論理展開は必然化されることになる。つまり、恐怖によってのみ信約の履行が実効的に担保され、秩序が保たれる。そこにリヴァイアサンが待っている。

失われた遺産と我々

ホッブズの議論を西欧思想史のなかに置いてみると、彼の理論の前提とする人間が失っているものが鮮やかに浮かび上がってくる。モンテスキューやプラトンによって専制を防ぐために不可欠であると考えられたもの、それはホッブズの世界にはない。ホッブズは、近代主権理論の定礎者の一人であるが、この定礎のためには既存秩序の正統性を破壊し尽くすことが必要であった。近代主権理論のための貢ぎ物として、この市民の徳としての矜持や名誉心という思想的遺産は捧げられたのである。

明らかなことは、市民がこれらの資質を失うのと平行してリヴァイアサンの手のなかにはまりこんでいくということである。この程度は、それぞれの政治社会における信用の水準、権力のコントロールの水準に比例している。ホッブズのアポリアを我々は、どこまで解き得たのだろうか。

岡本仁宏(おかもと まさひろ)

専攻は西洋政治思想史。

近著に

『現代の政治理論家たち マイケル・ウォルツァー：政治哲学の意味』(法律文化社) [分担執筆]

『ポランティアと市民社会』(晃洋書房) [分担執筆]など。